

私たちの幸せ

専修大学人間科学部社会科学科

森脇 真美

「この人達と私達日本人の幸せの感じ方は違う。ここにいる人たちはね、家族が一緒にいて、粗食でもいいから食べるものがある、歌が歌えればそれで幸せなんだよ。」この言葉を聞いた時、私は自分の中の迷いが消えた気がしました。私がフィリピンで過ごした2週間、それは短い時間ではあるものの、辛いこと、新しい気づき、喜びを沢山感じた大きな時間でした。フェアトレード工房でのインターンは、そこで働く貧困層にあるフィリピン人の方と、他のインターン生と一緒に活動をするものでした。石鹸作り、編み物、タティング、初めてのことで慣れない中、とにかくひたすら朝から夕方まで働くので、時間が過ぎるのがとても遅く感じられ、正直最初は苦痛でしかありませんでした。しかし、その時私はなんのためにここに来たのかを思い出しました。リゾート地のイメージの強いセブ島の隣にあるこの島で、貧困問題が存在すること、そしてここに住む人たちにとって働くということはどういうことか、そのことを学ぶために私はここに来たのです。私達はフェアトレード工房を管理している日本人の女性の方に話を聞きました。それは日本に住んでいる私達にとっては考えられないような衝撃を受けるものでした。この病院は、患者が来た時にまず最初に誰がお金を払うのかを聞き、そこで払う人がいなければその時点で治療は行われません。また、治療に必要なものを買ってこいと言われ、その間に患者が死んでしまっても仕方ないと言われる。それは、医者も生きていくためにはタダ働きはできないということ。もちろんそれは当たり前だ。でも人の命がそんな簡単になくなってよいのか。お金がなくて大きな病気になった人は死を待つだけなのか。お金があれば救えたかもしれない命がたくさんある。私は深く考えさせられました。また、工房で働いている人達は貧困の状態だったり、訳あって家を出てきたというような人たちが集まっていました。その中には生まれてから病院に行ったことがないという人もいました。私達は一緒に働いていた彼らにどんなところで育ったのか聞こうとしましたが話をそらされました。辛いことがたくさんあったのか。人にはあまり言いたくないのだと思いました。それでも彼らは今もあの工房で毎日一生懸命働いています。思わず、今までの自分の過ごしてきた生活と比べてしまいました。

私達はフェアトレード工房が休みの日曜日に、同じ団体の活動するボランティアに参加し、スラム街とゴミ山を訪れました。そこには思わず目をそむけたくなるような光景が広がっていました。私たちはスラム街で家庭訪問をしました。私達の訪問した家庭は両親と三人姉妹の5人家族で暮らしていました。父親の収入から考えて彼女らの一人一人にかかるお金は信じられないほど少ない。彼女達が学校に行くためのお金や電気代など、食

べていくのも精一杯な状態でした。また、ゴミ山に住む子供達は手も足も砂まみれで、子供と遊んだことで私たちの服が全身汚れてしまうほどでした。また、ここにいる子供達のほとんどは、この先もこのゴミ山で暮らす子がほとんどだと聞きました。働き口を探しても、それまでに出すお金がない。だからあえて外には出ようとはしない。私達が毎日学校に行ったり、買い物をしたり、遊んだり、何不自由なく暮らしていること、それがどれだけ幸せなことかを強く感じた瞬間でした。このボランティアで私達は今回お世話になった団体を作った代表の方にお会いし、お話を聞かせていただきました。その時に言われたこと。それが最初に述べた言葉です。私はこれを聞いて、好きなものを食べて欲しいものを買って、不自由なく暮らしている私達と、フィリピンで暮らしている彼らの考えの違いに気づかされました。私達は国も文化も育った環境も全く違います。考え方も幸せの感じ方も違います。だからこそ私は、"それぞれの幸せ"があるということは当たり前のことで、どんなことに幸せを感じるかということに正解も間違いもないと思いました。彼らはお金がなくとも十分幸せな暮らしをしていました。それは見た瞬間に私達にも届きました。いつも笑顔でニコニコしていること。幸せそうな顔でご飯を食べること。家族といつも一緒にいて、お互いを思いやっているところ。どんな状況でも歌を歌い出すところ。そんな愉快的なフィリピン人の方を見て、私は凄く幸せそうだと感じました。また、私はもう1つ気づいたことがあります。フィリピンの人はいつも楽しそうに働いています。おしゃべりをしたり、歌を歌い出したり、楽しみながら働いているのです。私は自分が何になりたいのか、どんなことをしたいのか、まだはっきりと決まっていません。でも私は、一度しかない人生を笑って過ごしたい、たくさん楽しみたい、何をするのも誰かのために働くのも、自分にとって楽しい、幸せだと思えることをやりたいと思いました。今回の経験は自分自身を成長させ、新しい一歩を踏み出すきっかけとなりました。これから私は、自分で見たこと聞いたこと感じたことを、もっとたくさんの人に広めていきたいです。

